

鍾乳洞の持つ雰囲気

式 正 英

四国の竜河洞は高知市の播磨屋橋からバスで1時間ほど東に行った所にある。物部川をその川口近くの橋で涉って、野市の街から入った比較的低い山、三宝山の中にある。そこはもう高知市でもなければ、南国市でもない。土佐山田町(旧佐古村)の逆川という集落の地内である。その存在は古くから知られていたようだが、洞口から400mの所に「記念の滝」と呼ぶ地下川の飛瀑が懸かり、それに阻まれて、奥の方は未知のままであった。地元中学校の教諭山内浩氏らによって1931年に探検されて以来急に世に知られるようになった。それが、こゝ50年ほどの間に高知県第一の観光地と云われるほどまでになった。バスが平野を離れてほんの僅かな時間で終点につき、そこから一寸あがるだけで洞の入口に着くから、全国のどの鍾乳洞より主要都市からのアプローチがよいと云うことになろうか。

山は低くとも古生代二疊紀の石灰岩層中に形成された鍾乳洞であり、本洞、支洞の知られている部分の総延長は4kmもあると云うが、探勝コースの部分は600mほどである。洞の入口に近い部分が極端に狭くて滝より上の奥深く広まった部分が人目に触れずに来たことも、また発見後直ぐに国の天然記念物の指定を申請したことも、洞内の細部の自然を維持するのに幸いた様に思われる。洞の規模は決して他の洞に優るほどのものではないが、鍾乳石や石筍やドリップカーテンや石柱など、いずれも取り付けられた電光の中で鈍く白銀に反射し、水滴をしたたかせて生々しい。場所々々に鉄柵や金網が張られていて防衛過剰の気味がないではない。しかし旧くからの知られている鍾乳洞が長い間に細部を人によって破壊され持ち去られて、壁面がノッペリし物足りなく見えるのに比べ、竜河洞の内壁では自然の豪華な脚色がそのまま確認できて素晴らしい。

壁面の黒く変色している部分は出口に近くなると黒光りして次第に判然として来るが、これはコビナガコウモリの糞尿の堆積の結果なのである。今も2万頭ものコウモリが棲み家としているし、この出口近くからは石灰華で固着された弥生式土器や炉の趾などの遺物が発見され、弥生人の住居跡であることも確認されている。こうした見処らの多い洞穴の常であるが、要所々々

に大層な名前を付けた名札が吊るしてある。天降石、竜宮殿、奥千本、天ノ川、連星殿、万象殿、最莊殿、奈落等々といった具合にである。しかも数10mも行かぬ内に出会わずこの種の名所には必ず人が立っていて、見物客が来ると見ると何か低い声でボソボソと説明してくれる。至れり盡くせりとも受けとれるが、別の見方をすれば鍾乳石に手を出すような不心得者を監視する効果もあるのではなからうか。

それにしても説明者達は観光地の案内人のイメージからすれば余りに素人っぽく素朴で、服装も物腰も飾り気がなさ過ぎる。尋ねてみたら全部地元の逆川集落の人達で、交代で常時20人ぐらいは説明役に出掛けて来ているとのことであった。逆川に在る財団法人竜河洞保存会が管理主体であり、洞穴は言わば「おらが村」の財産だったのである。いわば、この洞穴の自然保護は地元の人が皆で本気に引受けているのだし、著名になっているだけに経済的にも引き合うものがあるのだろう。成長のきわめて遅い鍾乳洞の細部の自然は、その保護に意識的に取りくまねば全うできないから、その点は成功している例である。洞穴を探勝する者にとって、洞穴のかもしれない雰囲気は、自然の差異から来る個性ばかりでなく、管理の形や常にそこにいる人達によっても随分と異なることに思いあたった。

竜河洞を訪ねたのは1985年8月だったが、その翌年4月には山口県秋芳洞を、昨年4月には沖縄本島南部の玉泉洞を訪ねる機会ももてた。いずれも目的の異なる旅の序いで鍾乳洞めぐりであったが、いずれも名勝として見事なカルスト地形を誇りながら、雰囲気はそれぞれに異なったものがあった。秋芳洞は余りに有名だが管理者は秋芳町で、観光課の職員が制服のジャンパー姿で説明にあたりしているの、何か物固い感じがぬぐえない。玉泉洞は隆起珊瑚礁をつくっている洪積世の琉球石灰岩に穿たれている鍾乳洞だが、昭和42年に調査されるまで余り知られていなかった所為か、細部の地形の保存が良好で見応えがある。しかしカメラのフラッシュ撮影も禁止とあるのには驚いたし、こゝにはある観光会社の所有物なのだ聞いて重ねて吃驚した。(1988年2月1日)